

実践報告会報告

関西医科大学総合医療センター分教室

1 はじめに

今年度の実践報告会は関西医科大学総合医療センターが報告を行った。関西医科大学総合医療センター分教室は、主に起立性調節障がいと摂食障がいで入院している子どもが学んでいる。二つの疾病とも新型コロナウイルス感染症が発生し、全国で臨時休校の措置が行われる中で激増したと指摘されている。

本発表では、分教室で学んだ経験のある生徒とその保護者への聞き取りを通して、分教室における教育効果についての振り返りと、関西医科大学看護学部石浦光世先生から「起立性調節障害の理解と支援」というタイトルで講演をしていただいた。

2 聞き取りより

数名の分教室で学んだ経験のある生徒と保護者への聞き取りを通して、共通していることは以下のとおりである。

- ・中学校では不登校の経験が多く通学することが難しかったが、通信制の高校に進学することにより、高校では「がんばってみよう」という意欲が出た。
- ・これまで通っていた中学校では「休みたい」「帰りたい」と授業中に先生に言いにくかったが、分教室では気軽に自分の体調を伝えることができたので、安心して勉強できる環境にあった。
- ・分教室で貸し出されるカードゲーム（トランプや UNO）やボードゲーム（人生ゲームや将棋、オセロなど）を入院している子ども同士で遊んだことが印象に残っている。
- ・同じ病気の子ども同士だからしんどさが分かり合える。そのため仲間意識が芽生えた。
- ・地域校では定期テストを受けることができなかったが、分教室では地域校の定期テストを受けることができた。

3 まとめ

石浦先生の講演では学校の先生に知ってほしいこととして、「身体の疾患であることを理解してほしい」「水分を多く摂取する」「暑い時には涼しいところで見学を」「家族について批判しない」など多くのアドバイスをいただくことができた。

今回の聞き取りでは、入院して分教室に登校することにより「学びなおそう」と学習への意欲を示す生徒が多いのが特徴であった。また分教室の教育的意義を見出すことができた。これからも子どものニーズに基づく支援を行っていく必要がある。

参考文献

現代の子どもたちと起立性調節障害 石崎優子 チャイルドヘルス 2023年8月号
診断と治療社

大川優子・安部義一・鈴木義一

COVID-19 感染流行下における起立性調節障害患者の問題点と当院での取り組み

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjrm/71/1/71_22/_pdf/-char/ja